

広報誌

ペケレベツとは

アイヌ語で「明るく清らかな川」を意味しており、清水町の由来となっています。



ペケレベツ



院長挨拶

トピックス

日赤看護学会

ベッドコントロールチーム発足について

健康管理室紹介

循環器内科紹介

消火技術研修会

赤十字イベント紹介

人事消息

編集後記



日本三大随筆とは誰もが義務教育で触れたであろう、枕草子(平安時代・清少納言)、方丈記(鎌倉時代・鴨長明)、徒然草(鎌倉時代、兼好法師)であるが、随筆とは今風に言うとブログのようなものである。ちなみに私も教科書で教わった以上に深く読み込んだことはないが、いつかはゆっくりと読みたいと思いながら数十年が過ぎた。日常の出来事や取るに足らない事物を事細かに観察し心眼でとらえ、それを筆者特有の価値観で著した文章は趣向を凝らした料理に似てエレガントである。

新型コロナウイルスが人間の日常生活を変えて久しいが、秋の深まりとともに第7波も落ち着き、旅や酒宴そして野外活動などしばし控えていたことが少しずつ再開された、空前の円安を追い風に訪日旅行者の増加、そして外国語診療も以前のように戻っていくのであろう。あらためて人の交流や文化的活動が生きていることに潤いを与えると感じる。人類が1世紀ぶりに経験した感染症パンデミックは丁寧で緻密な対面診療を退化させたが、医療機関の連携やデジタル情報機器を用いた迅速な情報共有など、目覚ましい進歩を遂げたものも多い。

ここ十勝も季節は夏を終え短くも豊穡の秋を迎えている、製糖工場がモクモクと吹く綿のような煙をつきシベリアから白鳥の群れが飛来し丹頂が落穂をついばむいつもの晩秋である。一方で当地の地域医療はひたひたと見えない足音を立てて進む高齢化、認知症や在宅医療ニーズの増加そして就労人口の減少など2025年そして2040年に日本中で取り組むべき医療社会問題に真っ向から対峙している。新設の健康管理室やベッドコントロールチームは職員の健康と病院の経営をよく守り、われわれのマルチタスク化はもはや止めることができない潮流である。

季節の移ろいや何気ないことの意義を丁寧に見出し感性に量るのが日本古来の伝統であり、それが“ものあはれ”である。地域医療においても何気ないことを当たり前と思わずによく“看る”ことが求められ、その上で未来を正確に予測するのが務めである。人の人生に同じものはなく、おしなべてクリニカルパスで扱うような簡単なものではない、長く続く with コロナの今だからこそ地域ならではの繊細でエレガントな医療が求められている。

“ゆく河の流れは絶えずしてしかも元の水にあらず、よどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし、世の中にある人とすみかとまたかくのごとし”、810年前に京で記された方丈記は世の事象や災禍をよく著し、そこに現代にも通ずる真理が垣間見える。



第23回 日本赤十字 看護学会学術集会を終えて

学会事務局長 透析センター看護師長 谷尻 智美



今年度7月16日～17日に帯広市とかちプラザで第23回日本赤十字看護学会学術集会が開催されました。「赤十字看護の未来～コロナ危機を乗り越えて」をテーマに準備を進め開催にこぎつけることができました。当日 WEB・参集含め約600人余りの参加者とTVでおなじみの講師の先生方の貴重な公演会を行うことができました。開催にあたり約1年半の準備期間と北海道内赤十字病院看護部長・北海道看護大学の学長・教授のお力添えの元ようやく無事に終わることができました。

初めてこの話を聞いた時は「まさか！」「こんな小さな病院ができるのだろうか？」「自分たちで大丈夫？」「本当に！！」こんな気持ちでいっぱいになりました。どのように運営したらよいか、イメージが何も無いままのスタートしそして、

事務局長なる大役まで、私には荷が重く看護部長・師長のサポートがあり何とか進めることができました。慣れない作業や聞いたことのない用語に翻弄され夜遅くまで、発送作業などを行い果てしない作業に途方に暮れたことも今となっては良い思い出です。

開催当日は悪天候で十勝晴れとはなりませんでしたが、病院職員が看護学会学術集会のために尽力してくれたこと多くの赤十字の仲間に出会えたことは、看護師人生の宝物になりました。支えてくれた方々に感謝の気持ちでいっぱいです。



第23回 日本赤十字看護学会学術集会

日にち：令和4年7月16日（土）・17日（日） 場所：とかちプラザ

2022年8月より、ベッドコントロールチームが発足しました。病床の効率的な運用、医療連携および在院日数の適正な管理等を通じて、経営の観点からベッドコントロールを行うことが主な目的です。メンバーは、院長を顧問とし、事務部長、病棟師長、外来師長、医療ソーシャルワーカーで構成されています。

キックオフ会議では、患者さんやご家族向けにレスパイト入院のリーフレットを作成したり、現場職員向けに「地域包括ケア病床」の利用に関する研修会の企画を検討しました。また、毎日の「ベッドコントローラー」を配置し窓口を一本化したり、電子カルテのトップ画面に病床利用率を「見える化」することなど、多くの改善案もでました。

これらの改善案について1つ1つ内容を掘り下げ、すでに実行しているものもありますが、現在は院内研修会に向けたチーム活動を展開しています。

組織を横断した入院調整や健康管理室と連動した患者さんへの情報提供等、他にもまだまだ課題はありますが、週1回チーム員で話し合いながら実行へのプロセスを進めています。





健康管理室紹介

総務課 医事係
診療情報管理士 経澤 知夏

介護を必要とするようになって、住み慣れた地域で自分らしい生活を最後まで続けられるよう「医療」「介護」「予防」「住まい」「生活支援」を一体的に提供する体制を地域包括ケアシステムといい、この中の「予防」「生活支援」に着目し、本年度9月より、「地域住民が住み慣れた場所でいつまでも元気に暮らす」、「職員が心身ともに健康で働き続ける」を目的とした健康診断および疾病予防、健康増進の企画・立案を精力的に行う健康管理室が当院に設置されました。

発足後まもなく、当院職員の集団免疫獲得に向け、職員のコロナワクチン抗体検査や職員のインフルエンザワクチン予防接種をICT(感染管理室)と協力して行い、職員の健康管理に携わってまいりました。

今後は上記の活動と並行して、清水町在住の国保加入者の方の特定健康診断受診率をあげる広報的活動や当院職員のヘルシーライフサポート(特定保健指導)実施率が100%になるよう促して行く事や、当院職員の健診時に使用する問診票・結果票を完全電子化し、少しでも紙使用量を削減できるよう努めてまいります。



十勝における国立帯広病院の役割

こんにちは。令和3年8月より毎週水曜日に循環器外来を担当させて頂いている吉廣剛です。出身は佐賀県。高校は長崎県の青雲高校。佐賀大学医学部の卒業で、医師になって11年間、福岡県で循環器診療に従事、その後、沖縄県の宮古島に移住、3年ほど南の島で働いていました。宮古島っていうとDr コトーですか？とよく言われますが、宮古島って、人口は55000人、コロナ前は年間100万人以上の観光客が訪れる人気の観光地です。意外かもしれませんが、島内にはICU,NICUを有する比較的新しい250床程度の総合病院があって、救急車も2000台以上も受け入れて、脳外科手術や心臓カテーテル手術も常時可能な急性期医療が提供されています。その後、十勝に再移住して、帯広徳洲会病院、帯広厚生病院の勤務を経て、現在、国立帯広病院で働いています。皆様のご存じの通り、国立病院は循環器専門病院として長く十勝で実績を残してきました。急性期医療の基幹は厚生病院ですが、循環器分野では厚生病院に引けを取ることなく、症例数を重ね、救急車や近隣の医療機関からの紹介を受け入れています。循環器に特化した病院だからこそ、胸痛や呼吸苦などの診療、検査の流れは非常にスムーズです。特に冠動脈造影CTが受診当日に撮影、結果説明まで終わるのは、専門病院ならではのメリットです。施設は非常に古い病院ですが、循環器分野における機動力と専門性、おもてなしの精神で、清水赤十字病院と密に連携を深めていきたいと考えています。

循環器内科 診療時間：毎週水曜日 8：30～17：00





消火技術研修会

会計課

廣田 恵吾

清水消防庁舎で行われた第35回消火技術研修会に参加してきました。様々な業種、企業の方々と交流しながら、火災を想定した消火訓練や通報訓練を学び、実際に火災が起きた時にどのような行動を取ればいいのかを明確に知ることができました。特に消火訓練では幼少期に訓練を行ったことはありましたが、実物の消火器や消火栓を使用した訓練は初めてでした。想像より体力が必要なことを知り、とても貴重な経験になりました。

また研修の最後に、一般的な布と防災仕様の布で比較した防災物品燃焼実験を行い、防災物品の燃焼の遅さに衝撃を受けました。自宅に防災物品があまりないので、万が一に備えて身の回りから準備していこうと考えました。



赤十字イベント紹介

「ACTION！防災・減災」の実施及びコンテンツのご案内



日本赤十字社

赤十字 WEB
ミュージアム

所蔵品紹介

赤十字ヒストリー

特別企画

赤十字情報プラザ

・利用案内

・アクセス

・予約について

お知らせ

その時、何を考え、どう動いたのか。赤十字とかかわりの深い出来事や人物などにスポットを当てます。

特別企画



佐野常民生誕200年

～日本赤十字社を創った男の素顔～

[もっと詳しく >](#)

救えなかった悔しさを胸に秘め、常民はその生涯をかけて人の命を救う仕組みづくりに励みました。しぶとく、めげず、あきらめない男がとった行動とは…

世の中の「防災」への意識が高まる

9月(9月1日 防災の日)に、災害発生時に家庭内で起こりうる危険についての備えを訴求する新たなコンテンツを制作しました。いつ来るかわからない災害に対応する一助になれば幸いです。

<https://www.jrc.or.jp/webmuseum/column/sano-200th/>



ACTION! 防災・減災

命のために今うごく

<https://www.jrc.or.jp/lp/bousai/>

人事消息

医師派遣 福岡赤十字病院

7月1日(金)～7月15日(金) 佐原 範之
8月1日(月)～8月31日(水) 佐田 政司
9月1日(木)～9月30日(金) 安井 隆治

内科専攻医 愛知医療センター 名古屋第二病院

7月4日(月)～7月31日(日) 東島 亜記

臨床研修医 仙台赤十字病院

7月4日(月)～7月29日(金) 仙波 実咲
8月1日(月)～8月26日(金) 関口 佳宏

臨床研修医 釧路赤十字病院

7月4日(月)～7月29日(金) 小葉松 斐

臨床研修医 愛知医療センター 名古屋第二病院

8月8日(月)～9月2日(金) 後藤 亮平
9月5日(月)～9月30日(金) 山本 雄介

臨床研修医 旭川赤十字病院

8月29日(月)～9月30日(金) 川上ひかる

臨床研修医 姫路赤十字病院

8月1日(月)～8月31日(水) 小丸 貴生
9月1日(木)～9月30日(金) 磯金 優樹

医学生 旭川医科大学

7月 1名
8月 2名
9月 2名

編集後記

放射線技術課にも新人女性技師が入社し、今までの親爺しかいない環境から抜け出すことができ、明るい笑い声の聞こえる職場に生まれ変わりました。(笑)

Covid-19の患者は依然として発生していますが、海外からの渡航者の上限数も撤廃され30数年ぶりの円安も追い風になって外国人観光客も戻ってきている報道も聞かれる様になりました。

昨年のペケレベツ22号編集後記でインバウンド(Inbound:外国人が訪れてくる旅行)需要の復活について述べましたが1年経ってやっと本当の事となりそうです！さらにこれから冬を迎え北海道の魅力である winter sport season になりアジア、ヨーロッパ、オセアニアなどからもこの十勝、その中でもサホロ、トマムに大挙して押し寄せて来るでしょう！

また以前の様に外来待合室で英語や中国語が当たり前飛び交う光景が目には浮かびます。

広報委員長 首藤 竹司

❖ 編集・発行責任者：上野 和久 ❖ 編集委員長：首藤 竹司 ❖ 発行元：清水赤十字病院

❖ 印刷：東洋株式会社

〒089-0195 北海道上川郡清水町南2条2丁目1番地 TEL 0156-62-2513 FAX 0156-62-4460

URL <https://www.shimizu.jrc.or.jp/> MAIL contact@shimizu.jrc.or.jp